兵庫県立歴史博物館運営懇話会委員による
令和5年度（2023）活動計画自己評価の外部評価

1 外部評価実施手順

① 当館運営委員へ「令和５年度（2023）活動計画自己評価」を送付した。
② 資料を参考に意見を募った。

2 外部評価を行なった委員

・鑛　　隆志　（神戸新聞社 執行役員姫路本社代表）
・土居　　正樹　（兵庫県立歴史博物館友の会 会長）
・長谷川 賢二　（徳島県立博物館 上席学芸員、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館 上席学芸員）
・不動　　美里　（姫路市立美術館 館長）
・山内　　敏男　（兵庫教育大学大学院 教授）

活動計画自己評価結果集計表

活動領域	目標数	自己評価			
		できた	どちらかといえばできた	どちらかといえばできなかった	できなかった
1 展示	8	5	3	0	0
2 教育普及	2	2	0	0	0
3 調査研究	3	2	0	0	1
4 資料の収集・保管・活用	6	1	0	1	4
5 博物館連携	3	2	1	0	0
6 博学連携	6	2	0	2	2
7 広報活動	5	5	0	0	0
8 参画と協働	4	4	0	0	0
9 管理運営	2	1	0	1	0
合計	39	24	4	4	7

3 外部評価者による意見等

事業全体

・充実した業務推進状況がよく理解できました。
・少ない人数で、膨大な量の業務を遂行され、市民、県民に喜ばれる状況であったと考えます。
・コロナ、館の修復工事を経て、さらにファンが増大傾向にあると思います。
・各職員の持ち味を活かした取り組みが行われているように思われます。
・シンポジウムの開催、児童、生徒向けのプログラムを拡充してほしいし、出張展示の機会も増やしてもらいたいです。地域、地域に郷土博物館や町の資料館などがありますが、学術的には歴史博物館がそれらを束ねる役目があると考えます。
・地域と地域の関係には、住民にも知られていない結びつきもあり、文化や産業の大きな流れをつくってきました。それらの全体を俯瞰することで新たな発見が生まれます。子供たちだけでなく、地域の人にとってもわが町を知る機会になるはずで、その役割にも期待します。
・人と人との関係が希薄、人口減少、一極集中、いじめ問題など、地方創生が叫ばれていますが、持続可能な街づくりや活性化など歴史に学ぶことが歴史博物館から発信を考える機会づくりなど小さなことからでも貢献できることから実践することが望まれます。

展示

【常設展示】

・ハンズオン資料の展示は、障害がある方だけではなく、子どもたちも触覚で史料を読み取ることができるので、今後もバリエーションを増やされてはいかがでしょうか。
・バリアフリーやユニバーサルデザインの観点から音声ガイド、点字キャプション、多言語化、触れることができる体験型展示など積極的に導入され、今後さらなる拡充を目指しておられます。常設展示は館の基幹となる存在であるため、鑑賞ツールの充実など計画的に手厚い対応が期待されます。
・博物館施設は、実物を五感で知るという体験が、多様な人間関係のなかでリアルに育まれる場所であり、その役割は、今後さらに重要になっていくものと思われます。
・歴史博物館は世界遺産・国宝姫路城に隣接しており、観光、国際交流での役割が期待されています。城郭はもとよりだが、日本の伝統文化を知るうえでの資料が豊富で、音声ガイドやキャプションで興味が増すことは間違いないです。いずれも人員、予算が絡むため、優先順位をつけながらの実施となるだろうが、知の拠点としての体制づくりと考えます。
・音声ガイドの整備も急務と考えます。「さわれる資料」の拡充を含めて、入館者対応への基準であり、一方で館への親しみも増します。音声ガイドでは、インバウンドに対しての言及がありますが、キャプションも含めてさらなる多言語化が望まれます。

【特別展等】

・特別展、企画展ともに来館者の満足度は極めて高いことから、企画内容の充実と質の高さが窺えます。
・特別展、企画展は見ごたえのある内容でした。歴史博物館の良さは、研究成果が展示の裏打ちとなっている点にあります。改修工事後の施設の慣らし期間のため「目玉となる展示資料が少なくなった」との自己評価でしたが、伝える側として展示をよりブラッシュアップしたいとの思いと受け止めています。その内容については「満足度」の数字が物語っていると考えられます。

・開催展覧会に対する満足度は非常に高いだけに、入場者数の目標達成率がともに五割程度にとどまっているのは残念です。館としての広報活動はデジタルコンテンツの充実をはじめ極めて積極的に推進されていますが、展覧会の集客に繋がる広報・宣伝に特化してぜひ多角的に検討・検証いただければ新たな方策が見えてくるように思われます。

教育普及

・入場者数の関係では、今後の取り組みにあるように講演会などの機会を増やすことが望まれます。歴史への関心は高く、一般の生涯学習でも人気のある講座が多いため、潜在的なファンを掘り起こすだけでなく、①文化、歴史遺産を保護し、継承する県民意識を高める②調査、研究の成果を情報発信できる場としての役割にもつながります。

調査研究

・「目録の刊行」や、資料収集保存に関する業務に「できなかった」が目立つことが気にかかります。こうした結果が恒常化すると、モチベーションの低下にもつながりやすいので、小さな一歩であっても、何か前進することを目指し、それを大切にしていただきたいと思います。

資料の収集・保管・活用

・研究論文の発表はじめ収蔵品データベース登録の拡充についてよく達成されている一方、収蔵資料の計画的修復の実施が0%となっています。目標である「資料の収集と次世代への継承、収蔵資料の適正かつ効果的な活用方法の構築」に関して、計画的かつ有効な予算措置が講じられることが期待されます。
・史料のデータベース化につきまして、マンパワーが必要なことからかなり大変ではないかと思われます。立体遺物のデジタル保存なども進められているところがありますので、参加を募る、あるいは既存の組織とコラボして進める計画があっても良いかなと思います。
・資料の収集、保管、活用で「できなかった」が目につきましたが、要因はデジタル化に尽きます。膨大な資料のデータベース化が簡単ではないことは理解しますが、次世代への継承、効果的な活用を図るためには、具体的なスケジュールを明示し、確実に進めてください。

博学連携

・アウトリーチやリモート授業の推進も、究極的には博物館で実物を実感する感動につなげることを目標に据えることが重要でしょう。電子機器類による学習ツールの開拓と合わせて、ガイドボランティアや対話型鑑賞など対面による教育普及プログラムの継続・強化を今後とも期待します。
・教員研修については、相互交流の時間（教員同士の交流と共に、お手数をおかけしてしまうことになりますが、学芸員のみなさまと直接対話できるのも魅力的だと思います）、講師の解説時間（実践の意味付け）を充実させることで、実のある研修としてより認知していただけると思います。若手の教員が増えてきているので、こうした研修の機会は重要だと考えられます。
・項目的には学校へのアウトリーチになるが、デジタル関連では一般の授業でタブレット活用できる動画の制作に努めてください。リモート授業の素材も同様で、立体の収蔵品は教科書などでは表側の写真しか見ることができません。動画であれば裏側を含めて全体が把握できます。「鉄ものがたり」でたたらの動画を拝見したが、非常に分かりやすかった。教育普及、博学連携の拡充にもつながるコンテンツになりうると考えます。

広報活動

・館の案内パンフレット等が市内の公民館等多くの施設に置かれ、また神戸新聞で数多く報道されて良かったです。

・地元紙を媒介として、貴歴博・市文学館・市美術館の3館が協働し共同広報ポスターの制作が実現したことを第一歩と捉え、今後は、共通テーマによるイベント開催や各館の専門性を相互に生かした連携企画の実現など、持続可能な連携関係の醸成が期待されます。

・県は毎月一日の新聞で記事が掲載されるが、中播磨県民センター関係は最終面一面のみで、歴博部分は極めて狭い。姫路市の広報（月１回発行）では、市の関係（美術館・文学館。書写工芸館）が毎月細かく掲載されている。市の広報に歴博も入れて欲しいです。

参画と協働

・友の会活動にも大変ご協力いただき感謝です。